

---

# ドロップス・レイン

若山 かおり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドロップス・レイン

【NNコード】

N3306S

【作者名】

若山 かおり

【あらすじ】

テスト勉強中の将行のもとに現れた、幼馴染の千紗。彼女は童心にかえつて「神様の飴を探そうよ」と将行を誘う。

桜庭春人さん主催の企画『candy store』出品作品です。

- ・各回「」とに設定されたお題のお菓子を作品内に登場させる
- ・一話につき2000~4000文字

・ジャンルは自由

本作は『第2回 キャンティ（飴／ドロップ）』です。

雨が、降っている。

無数まさゆきの光が細い尾をひきながら、あとからあとから落ちてくる。  
将行は勉強机から顔を上げて背中を伸ばした。首を回すと、ぼきぼきと小気味よいほどの音が鳴る。目は充血していて、視界の端はかすんでいた。

三日前から降り続いている雨は、まだ止みそうになかった。  
空は灰色で薄暗い。

本当は、まだそれほど遅い時間でもない。テスト期間中なので帰りが早いのだ。

将行はため息をつくと、明日の教科のために再び机に向かった。  
教科書に印刷されている文字の羅列を頭に叩き込もうとする。しかし、どうにもうまくいかない。頭がぼうつとする。昨日はほぼ徹夜だったからか。

「将行！」

窓の外から細く高い声がした。初めは、気のせいだと思った。

「ねえ、将行つてば！」

確かに声がする。将行は窓を開けた。

将行の部屋は一戸建ての一階にあり、玄関のほぼ真上に位置している。見下ろせば通りに面した門の前で、隣に住む幼馴染の千紗が大きく手を振っていた。肩にちょこんと乗せた赤い花柄の傘と、真っ直ぐな長い黒髪が揺れている。

「お前！？ 何やつてんだよ？」

「将行、雨だよ。出ておいでよ。早くしないと神様の飴を取り逃がしちゃうよ」

「何、言つてんだよ！？」

叫びながら将行は外へ飛び出した。

「あつめ、あつめ～」

千紗は濡れるのもおかまいなしに傘から手を伸ばして、即興らしき歌を歌っていた。今にもスキップでも始めそうな足には、何故かおばさんのガーテーニングシューズを履いている。

「お前、靴……」

かかとの方が妙に低くなっているそれは、決して雨の日に向いたものではない。故に千紗の白いハイソックスは撥ねた泥で汚れてしまっている。

「雨なんだから長靴を履かなくちゃ」

「それ、長靴、じゃねえよ」

「長靴のつもり！ ねえ、将行も長靴を履いてきてよ」

「長靴なんか持つてねえよ」

子供の頃は、足のサイズが変わるたびに新しい長靴を買つてもらっていた。長靴は雨の日の必需品だった。 いつたい、いつから雨の日でも靴で歩くようになったのだろう。

「おじさんとお揃いの釣り用のやつ、持つてこりゃない

唇を突き出して千紗がむくれる。

「何で俺があ前に付き合つて、そんな阿呆な格好をしなくちゃならないんだ？」

「いいじゃない。……子供の頃みたいに、神様の飴を探そよ

雲の上に住んでいる、泣き虫神様の涙が飴になつて、雨と一緒に降つてくる。

子供の頃に歌つた歌だ。

もしかしたら本当に飴が降つてくるかもしねないと期待して、二人は雨が降ると先を争つて外に出た。長靴を履いて、傘を差して。

「お前……」

「い、い、か、らー」

結局、千沙に押し切られた。

物置から引っ張り出してきた長靴は、膝まであるためか歩くたび

にぼこぼこという音がする。千紗のガーデニングシユーズと対照的で、一人が並ぶなんとも間抜けだつた。家の前がそれほど人通りの多い道でなかつたことに将行は感謝した。

将行の姿に満足した千紗は、次の要求を出す。

「ねえ、傘をひっくり返してよ」

赤い花柄の傘をぐいっと突き出す。当然、千紗の長い黒髪は守ってくれるものを見つけて次々に雨粒の襲撃を受けるが、気にするそぶりも見せない。

「あれも、やるのか？」

将行は肩を落とした。

子供の頃の一人は、神様の飴を取る方法を真剣に話し合つた。もし降つてきたら絶対に落としてはならない。そのためには傘の骨をひっくり返して皿の形にすればいいのではないか。そんなことを将行が言い出した。雨水も溜まつてしまつが、飴を落とすよりはずつといい。

千紗はうまく傘をひっくり返すことができなかつた。力が足りなかつたのかもしれないし、傘を壊してしまふかもしれないという不安から思い切りが足りなかつたのかもしれない。だからいつも将行がやつてあげていた。一度、傘の骨を折つてしまつたのはご愛嬌だ。一人してきつちり怒られた。

「神様の飴、欲しくない？」

真顔で千紗が尋ねる。

「ガキじゃあるまいし、欲しいわけねえだろ」

昔はどうして欲しいと思ったのだろう。

願いの叶う魔法の飴というわけではない、ただの飴だ。けれど、神様の飴、というだけで、子供だった一人にはすごいものに思えた。手に入らなくても、空から飴が降つてくると考えただけでわくわくした。

本当は いくら子供でも、飴なんか降つてくるわけがないと分かつっていた。ただ雨空の中で千紗とはしゃぐのが楽しかつた。

そのうち名案を思いついた。

ある雨の日、千紗の好きな苺の飴をポケットにねじ込んで外へ出た。そして気づかれないように千紗の傘に乗せた。ほとんど身長差のなかつた千紗の傘は思ったよりも高くて大変だつたけれど、何とか成功した。千紗は飛び上がって喜んで、一つしかない飴だから半分こしようと、割れもしない小さな飴を一生懸命、分けようとした。その結果、水溜りに落としてしまう。泣きじゃくる千紗に、水溜りの水はジョウハウツしてまた雨になるから、この飴もジョウハウツしてまた降つて来るよ、と将行はうそぶいた。

それから将行は、いつもポケットに苺の飴をいくつか忍ばせるようになつた。そんなことが何度も続いた後、今度は自分の傘にコーラ飴が乗つていた。

「私は欲しいな、神様の飴」

千紗の長い黒髪が、濡れて頬に張り付いていた。将行は黙つて傘を受け取り、ひっくり返してから千紗に戻す。千紗は嬉しそうに笑つた。昔と同じように。

「小さい頃は楽しかつたなあ……」

聞き取るのがやつとの小さな声。

そして、それから。呟くように。

「……私、先輩に振られちゃつた……」

白い頬に涙が伝つた。千紗の瞳から溢れる、きらきら光るドロップス。

美男美女のカップルだと、学校中の注目の的だつた。先輩と並んで歩く千紗は無邪気な笑顔を振りまいていて、先輩の取り巻きにすら認められていた。

「……そんなことだらうつと思つてたよ」

将行は口をへの字に結んで目を眇める。

「つまんない女、つて言われた」

千紗は足元の小石を見つめていた。

「それがどうした?」

将行の吐き捨てるような口調に、千紗は思わず顔を上げた。

「それがどうした、つて？ 私、先輩に、要らない、つて言われちゃつたんだよ！？」

「じゃあ、そんな奴と一緒にいる必要ないだろ。別れてスッキリだ」  
将行は真っ直ぐに千紗を見る。精一杯の侮蔑を込めた眼差しで。  
千紗の口は半分開いたまま、一瞬止まった。しかし、次の瞬間に  
は将行に詰め寄る。

「私はそんなふうには思えない。だつて先輩は私のすべてだつたんだよ？」

「お前は馬鹿か？ お前の存在理由は先輩なのか？」

「そうよ！ そうだつたのに……」

将行は大きくため息をついた。

「お前さ、何しに来たんだよ？」

訊かなくても分かっている。千紗が欲しいのは肯定の言葉。  
だけど口が裂けてもそんな言葉は言つてやらない。

「……将行、ひょつとして怒つてる？」

剣呑な雰囲気に戸惑い、千紗は上田遣いに将行を見た。将行はずつと腹の底に沈んでいた思いを静かに吐き出す。

「ひょつとしなくても、怒つてる。俺は、誰かが俺のことをつまんない奴と言つても平気だ。世界中の奴が、俺をカスと言おうがクソと言おうが関係ない。俺様の価値は俺様が決めるからだ」

「あはは……。マサちゃんらしいなあ……」

千紗は苦笑しながら懐かしい呼び方をした。

「……長靴を履いてくれたり傘をひっくり返してくれたりしても、マサちゃんは慰めてくれたりはしないんだよね」

千紗は顔を隠すように傘を傾けるが、骨がひっくり返った傘ではうまくいかない。

「俺は優しくないからな」

「違うよお。優しいからだよ」

千紗の田尻から、小さな輝きが細い尾をひきながら、あとからあ

とから落ちてくる。

「ふん。ちつとは周りを見ろよ。……お前は一人じゃないから、さ  
将行はふと思い出してポケットをまさぐった。人差し指の先がお  
目当ての固い感触を探し当てる。

「神様じゃなくて、俺様からだ」

将行はそれをやすやすと千紗の傘に乗せた。千紗は傘をそっと下  
ろし、それが何かを確かめた。

「目を覚ませよ」

白地に水色のストライプの包装。眠氣スッキリ と書かれたそ  
れは、将行が勉強中によく舐めている飴だ。

「……ありがとう」

千紗は小さく微笑んだ。

「ごめんな。心配かけて……」

「ふん」

将行が顔を背けようとしたとき、ふいに千紗の体が煙のよう消  
えた。

「え……？」

呆然とする将行の前に、おばさんのガーデニングシューズと骨が  
反対側にひっくり返った赤い花柄の傘。ぽつんと残されたそれらは  
何も語らない。

「……幻……？」

やがて雲間から光が差し、雨は止んだ。

三日前、自宅の風呂場で千紗は手首を切った。

学校には風邪で通しているが、夜中、救急車のサイレンに起きた  
れた将行はそれを知っている。大騒ぎしたもの、たいした傷では  
なかつた。しかし家に戻ってきた千紗は、虚ろな瞳のまま。起きて  
いるのか寝ているのか分からぬ状態だった。

憂鬱だつたテスト期間が終わった。結果は散々だろうが、とりあえず解放された。追試が確定するまでの、つかの間の休息だ。

将行は自室に寝ころがり、ぼんやりと天井を見ていた。撮りためていたビデオを見るつもりだったのだが、どうにも気分が乗らなかつた。

「将行！」

窓の外から声がした。

将行は弾かれたように駆け出して、ガラス戸を力任せに開け放つ。そこに、千紗がいた。

通りに面した門の前から、将行を見上げている。

眩しい太陽の下で、大きく手を振っていた。綺麗に切りそろえられた黒髪が、肩で飛び跳ねるように揺れていた。

玄関に向かつて走りながら、将行は千紗にかける言葉を考える。よう？ おかえり？ 馬鹿者め？ ……？

外に出て、心なしか緊張した面持ちの千紗を目にしたら、不覚にも目頭が熱くなつた。

声が震えないように、将行は細心の注意を払う。

「……一緒に追試、受けようぜ」「そっぽ向きながら将行は言った。

左の耳たぶに届いた息遣いから、千紗の破顔が感じられた。陽ひの光が二人を優しく包み込んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3306s/>

---

ドロップス・レイン

2011年7月23日03時27分発行